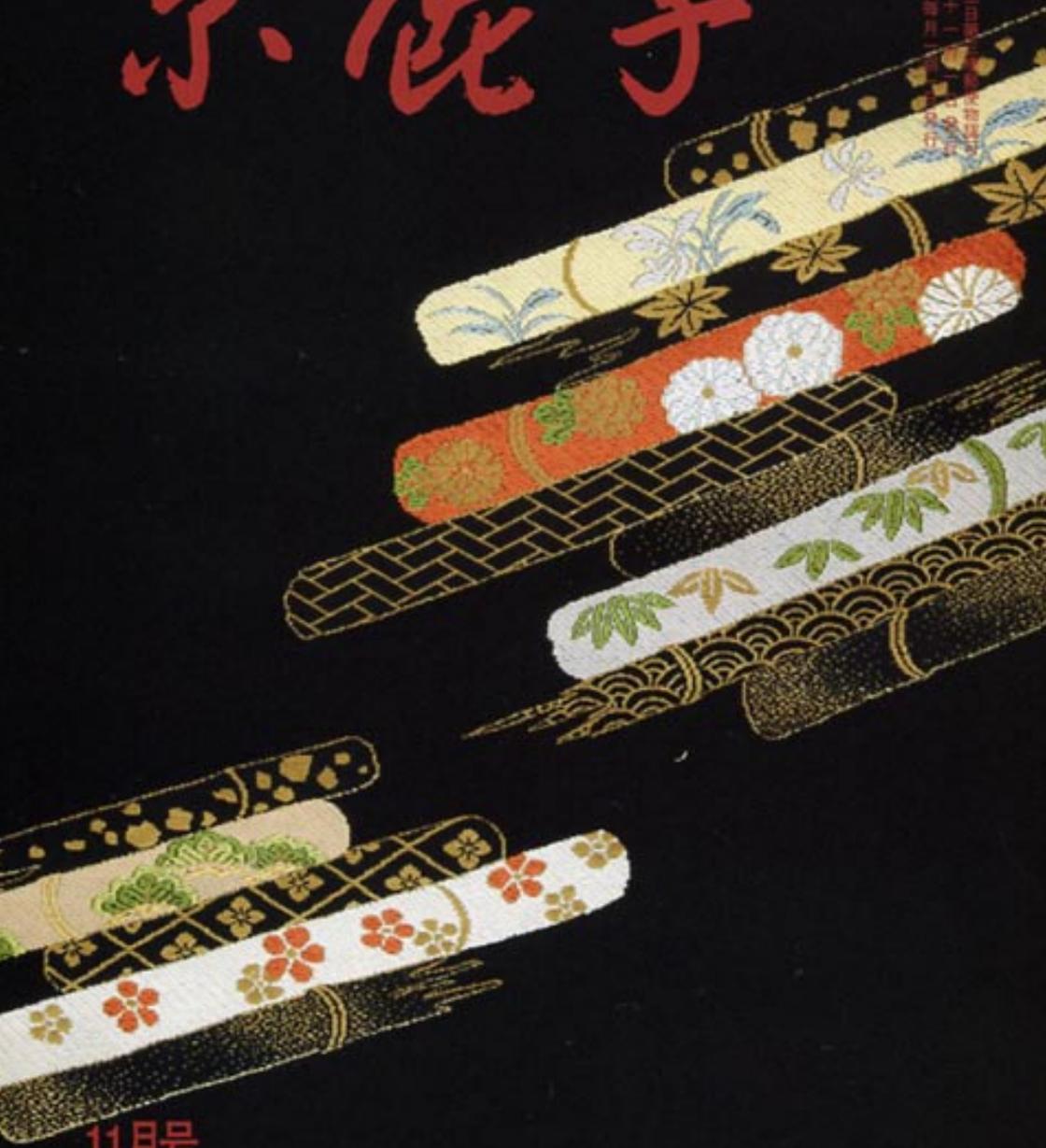


京鹿子

昭和十一年十一月十日
創刊
東京市神田區



11月号

— 近 詠 —

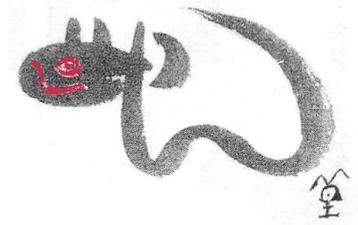
館小春 丸山佳子

立板に水のごとしや二百十日

ひと目惚れする看板の小春顔

寸評に思はぬ爆笑館小春

どの木から秋早きかと宇治に来し





山つ神の筋書どほり栗はじけ
藤袴身丈そろへて迎えくれ
手を振れば影も手を振る入り彼岸
おどし銃や鞆一つの私に
割り切れぬ奇数九月の雲ま白
敬老日にすぎたるお言葉を



豊田都峰

灌響集 その三

吾 亦 紅 錫 杖 と し て 辻 地 蔵
夕 か ぜ の は て し あ た り か わ れ も こ う
夕 か げ の 化 身 め き ゐ る わ れ も こ う
西 山 の こ だ ま ま み れ に 竹 を 伐 る
竹 を 伐 る 雲 ひ と ひ ら を さ わ が せ て
空 の 日 や 茜 そ ま り に 雲 ひ と つ



空の日や茜に星をうちをはる
をちこちに葛嵐して古戦場
落日に噛みついてゐる石榴ひとつ
北向きの軌道にのつてゐる残暑

他誌掲載作品控一覧

俳句研究2009秋の号 五句

俳句四季九月号 巻頭三句

俳句九月号 八句

秀華採集

檸檬齧り自分を騙すこと知らず

村田 富美子

たちどころに反応を表すようなものを持ち出して、心の綾を表現した点を認めたい。そして、心理にしても善悪にしてもはつきり具体的に表出することが俳句を成立させる。

初秋の雲の礼容今日の事

遠藤 タミ子

夜の秋うすむらさきの一筆箋

畑 佳与

「礼容」という語句を用いるのは日頃の心の在り方を示す、語句の選択は大切な要素。季節のちよつとした動きとちよつとした思いの取り合わせを評価する。

近 詠

月白

山の影野の景こゆき牛蒯引く
沈黙は風を呼ぶなり牛蒯引く
月白の山一景の動悸かな
鮎落ちて川いろ戻す余情とも
不覚にも猫が咳する白露の夜
萩まつり二句

風呼んで神の意となる萩ごよみ
白萩やことばの善意聞きしとき

鈴鹿
仁

神麓集



下 剋 上 林 日 圓

冬ざれてかへりみるなし下剋上
吹き上ぐる潮風凍てる後鳥羽院
我れこそは新島守と楯明り
冬の鳥みかどいたみて隠岐を出ず
隠岐寒し廃仏の跡まざまざと

新関一杜逝去 北村 香朗

先達をふと攫いたる土用あい
夏の暁ケータイは告ぐ師の訃報
黙しつつ遺体に菊を埋めつづく
白菊の棺に芭蕉の著書納む
百日紅大揺れの街火葬場へ

パラソル 和田 照海

海浜のパラソル西へみな傾ぐ
一島の端の左右より出でて磯狩火
傘は杖杖は杖なり梅雨長し
大仏に内視鏡とや初嵐
水馬飛んで灯虫になりさがる

仲 間 高 木 智

蓑虫と貌を合せてほぐれけり
蝉時雨一つ夕餉を啼き続け
一皿に夕餉の牛蒡あれば佳し
養殖の鮎ぞ落ち行く事もなし
落鮎の跳ね止み大いなる眼玉

法師 蟬 藤 岡 紫 水

法師蟬一樹一樹が負ふ孤独
家毎に綺羅星降りて盆の里
星消えて朝顔のこす暁の空
堂縁に西瓜尻据糸和尚留守
舗装路の亀裂が放つ残暑光

松 田 都 青

御転婆になるかも知れず天瓜粉
踏み込めぬ森ばかりある露伴の忌
梅雨晴間老いの眼鏡はすぐ曇る
動かない空気動かす渋団扇
サングラスかけて別れた軽い罪

神麓集



榎 植 襦 寝 瓶 史

神なきの素顔のぼつた鈴の緒に
斎田に宮司交りて稲を刈る
技巧派の榎植細枝の位置極む
記念樹に師の声のして榎植落つ
当り藪秘めてゐさうな罫雲

山田をがたま

片眼に不慣れなままに残暑状
かなかなや電動ベツド軋むなか
吾が身ながら気力もどら秋に入る
亡き父母の加護身にしみて秋に入る
寝返りの度に骨泣き秋暑し

舷越 美喜

玉虫や母の遺せし衣裳箱
炎天下鳩も鴉も来なくなり
展覧会出て海よりの風涼し
堀に蓮咲きて静かな城下町
明け易し海のほとりの旅の窓

星月夜 丹生をだまき

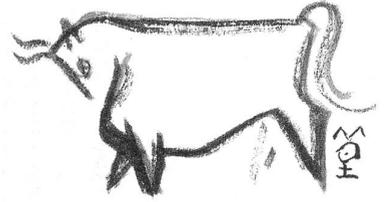
トルファン発長蛇の列車星月夜
星になつた鷹のお話星月夜
原色の背高カンナ風煮ゆる
夢まぼろしのこの世の一ト夜流燈会
夭折の俳友へ流しぬホ句燈籠

神の杜 松本 鷹根

神の杜水を余して糸とんぼ
淡淡と神樹は高さ涼とせり
緑蔭に御座候の樹齡あり
牛蛙孫に聞かせる一語欲し
威し銃歎声に似てあと空し

含紅抄その十三 沼田 巴字

羽搏けるつばさとなりし夏の島
沖も陸も眠りの中や天の川
吾亦紅見入つてをればほとけの目
寺もまた夢ある国や秋の蝶
いちじくを割ればあるひは母の乳



京鹿子集

豊田都峰選

ハンガールの傾きをりぬ熱帯夜

檸檬齧り自分を騙すこと知らず

夜の秋飾るランプを磨きをり

古書店の本はつたいの匂ひする

行きゆけど來竹桃の壁の中

初秋の雲の礼容今日の無事

願かけはいつも媛神花野風

青竹の結界の涼勅使道

湖は古墳の鏡草の花

いのちとも亡き師の一句天高し

京都

村田富美子

鎌倉 畑

佳与

宮崎

遠藤タミ子

江戸

伊吹

之博

梅雨深し口中くまなく照らさるる

窓拭いて八月の雨たしかむる

ががんぼう脚の長さは草食系

ただ歩く山百合を見し記憶まで

夜の秋うすむらさきの一筆箋

山法師机並べて親と子と

水遊び他人と家族区別なし

氷菓持つ少女の笑顔天使なり

かくれんぼ一役を買ふ花南天

夏のむし自由研究子の話